

## 問題 I

次の本文と本文中の下線部（ア）～（エ）に関する設問を読み、

(1)	(2)
-----	-----

～

(25)	(26)
------	------

に入る最も適切な語句を下の語群より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。

日本の歴史にはさまざまな戦いがあり、それぞれの時代を形作ってきたといっても過言ではない。古代において、稲作が人々の生活を大きく変えたことはよく知られている。たとえば彼らの環濠集落には濠や土塁がめぐらされた。また、高地性集落は日常生活に不便な山頂部等に設けられていた。こうした住居形式は、戦いを意識したものであったことがうかがわれる。古墳時代中期の副葬品には、鉄製防具や武器が多く見られるようになる。<sup>(ア)</sup>ヤマト政権は、その支配体制拡大の過程で、地方豪族の抵抗を排除するための戦いを実行した。一方、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗を喫したことから、ヤマト政権は対外的な防衛策として大宰府近傍に大野城や

(1)	(2)
-----	-----

などを築いた。その後、律令制度の確立とともに、軍事面での中央集権的な指揮命令系統が整備された。

8世紀半ばに初期荘園が生まれ、兵士の弱体化がみられたことから、792（延暦11）年、陸奥、出羽、西海道諸国等を除いて軍団・兵士が廃止され、

(3)	(4)
-----	-----

が置かれた。この制度は国ごとに異なっており、いわば各地方の守備兵であったが、それまでのような徴兵された一般農民ではなく、志願による郡司の子弟や有力農民等を基盤としていた。

9世紀末から10世紀頃、寄進地系荘園が広がりつつあるなか、地方の豪族や有力者は武装して勢力の拡大を図った。各地の紛争を鎮圧するために中央から派遣された者の中から、その地方に土着して武士となる者が現れ、家子・郎党を率いて武士団を形成するようになった。1019（寛仁3）年の刀伊の来寇に際して、

(5)	(6)
-----	-----

であった藤原隆家らがこれを撃退したことから、東国や瀬戸内海ばかりでなく九州にも武士団が形成されつつあったことがわかる。これらの武士団の一部は地方の軍事力を担う一方、朝廷や中央貴族に登用され、宮中や市中の警護・警備に当たる者もあった。

地方武士団が成長する中で、中央貴族の血筋を引く清和源氏や桓武平氏は、軍事貴族である武家となってその後の時代を切り開くことになる。源平の争乱を経て鎌倉幕府が成立し、征夷大將軍は武士の統率者を意味するようになった。武士は宗家と分家からなる一門の惣領の下に団結した。武士はまた土地支配を拡大していったが、武人としての地位と役割を守るために、笠懸や犬追物などによって武芸を磨くことも怠らなかった。<sup>(イ)</sup>だが文永・弘安の役は、戦術戦法や軍事思想から武士の生活にまでさまざまな影響を与えるとともに、鎌倉幕府衰亡の一因にもなった。

室町時代になると、地方における守護の力が大きくなっていった。將軍足利義満から義教の代にかけて

(7)	(8)
-----	-----

といわれる直轄軍が整備され、將軍権力を支える軍事力を構築するとともに、守護大名を牽制した。応仁の乱は、結果として有力守護を弱体化させることになった。これにより下剋上の風潮が生まれ、地方には新たな実力者として戦国大名が台頭してきた。戦国大名は貫高制を課役や軍役の基準とし、寄親・寄子制によって堅固な軍事組織を構築して集団戦を実施した。

江戸幕府は、旗本・御家人を將軍直属の軍事力とし、さらに諸大名に軍役を賦課したが、これらのことを象徴的に誇示したのが1634（寛永11）年の將軍上洛であった。<sup>(ウ)</sup>江戸時代はいわゆる天下泰平であったといわれるが、軍事力の整備がまた緊要な課題として顧みられるようになったのは、18世紀後半以降、外国勢力の来航が現実のものとなったからである。<sup>(エ)</sup>幕府権力に衰退の兆しが見える中で、諸藩では藩政改革が行われ、物心ともに成長を遂げる雄藩が現れてきた。彼らが軍事的にも明治維新への原動力となるのである。とりわけ薩摩藩や長州藩は、欧米列強が持つ近代的軍事力の脅威を目の当たりにして、自らもその整備と強化に努めたが、幕府も1855（安政2）年、長崎に

(9)	(10)
-----	------

を設けて海軍教育を行った。

明治維新によってそれまでの藩兵の一部は各地の鎮台に編成され、これが後に師団に改編される。

(11)	(12)
------	------

は1869（明治2）年に兵部大輔となって軍制改革を提起したが、途半ばに斃れた。だが1873（明治6）年、徴兵令が公布され、近代軍隊の基礎が固められた。1878（明治11）年、参謀本部が設立され、1893（明治26）年には海軍の作戦運用を担う (13) (14) が分離独立した。日清戦争、日露戦争、日中戦争及び太平洋戦争に際しては、 (15) (16) が設置されて戦時における最高統帥機関となった。

1945（昭和20）年の敗戦によって日本は武装解除されたが、朝鮮戦争勃発後の1950（昭和25）年8月、在日米軍出動後の軍事的空白を埋めるため警察予備隊が創設され、これが後に陸上自衛隊に発展する。他方、1952（昭和27）年4月に発足した (17) (18) は、太平洋戦争時に日本周辺海域に敷設された機雷の掃海活動等に大きな成果を挙げ、その後海上自衛隊へ発展した。1954（昭和29）年に発足した航空自衛隊を併せ、三自衛隊は今日において日本の「平和と独立を守り、国の安全を保つため」（自衛隊法第3条第1項）の組織として位置付けられている。

#### 設問

- (ア) 倭は、鉄資源確保のために早くから弁韓の旧地に分立していた諸国と密接な関係を結んでいたが、この諸国の総称を何というか。 (19) (20)
- (イ) 武芸を鍛錬する日常生活や武勇を重んじた武蔵国の武士の様子が描かれた、史料的价值を有する鎌倉時代の美術品は何か。 (21) (22)
- (ウ) 江戸幕府において、軍事を司る職制に対し、財政、司法等の実務に従事した文官の職制を何というか。  
(23) (24)
- (エ) 武家による戦争が一応終結し、戦乱の世が収まったことを何というか。 (25) (26)

#### [語群]

- |            |            |             |            |            |
|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 01. 按司     | 02. 異国警固番役 | 03. 胆沢城     | 04. 大久保利通  | 05. 大村益次郎  |
| 06. 男衾三郎絵巻 | 07. 海軍軍令部  | 08. 海軍参謀部   | 09. 海軍省    | 10. 海軍司令部  |
| 11. 海軍操練所  | 12. 海軍伝習所  | 13. 海軍兵学校   | 14. 海上警備隊  | 15. 海上幕僚監部 |
| 16. 海上保安庁  | 17. 勘解由使   | 18. 徒士組     | 19. 加羅     | 20. 基肄城    |
| 21. 木戸孝允   | 22. 給人     | 23. 清水寺縁起絵巻 | 24. 久坂玄瑞   | 25. 百済     |
| 26. 蔵人     | 27. 警備隊    | 28. 元和偃武    | 29. 元老院    | 30. 健児     |
| 31. 坂本竜馬   | 32. 志波城    | 33. 辰韓      | 34. 枢密院    | 35. 大本営    |
| 36. 多賀城    | 37. 高安城    | 38. 大宰権帥    | 39. 月番     | 40. 天下布武   |
| 41. 天狗草紙   | 42. 天和の治   | 43. 東征大総督   | 44. 長門探題   | 45. 納屋衆    |
| 46. 馬韓     | 47. 引付衆    | 48. 評定衆     | 49. 文保の和談  | 50. 平治物語絵巻 |
| 51. 保安隊    | 52. 奉公衆    | 53. 政所      | 54. 蒙古襲来絵詞 | 55. 役方     |
| 56. 山県有朋   | 57. 陸軍省    | 58. 兩統迭立    |            |            |

## 問題 II

次の文章を読み、文中の空欄 (27) (28) ～ (49) (50) に入る最も適切な語句を下の語群より選び、その番号を所定の解答欄にマークしなさい。

社会活動の範囲が広がるにつれて、遠隔地への通信や輸送の便を高める必要性が生じ、人はその手段を発達させてきた。通信の形態も一対一のものから、多数の人々に同時にコミュニケーションを図る、いわゆるマスメディアを介したもので多様化し、輸送手段の進歩とあいまって、社会や文化に深く影響を及ぼすようになる。日本の歴史においても、その時代の社会や政治を反映させるかのように、通信や輸送のありようは変化してきている。現代においては、マスメディアを介した情報の伝達や、交通網を利用した物資の輸送が当然のごとく行われるが、このような利便性を我々が享受するようになったのは、つい最近のことである。

現在知られている遠隔地とのコミュニケーションの方法のうち最も古いものは狼煙<sup>のろし</sup>である。『 (27) (28) 』天智天皇三年の条に「対馬島、<sup>さきもり とぶひ</sup> 壱岐島、筑紫国等に、防と烽を置く」という記述があるが、ここにある烽とは狼煙のことである。

平城京の時代になると、中央集権化が進むにつれて交通制度として官道が整備され、30里（約16km）間隔の駅家に (29) (30) を置く制度が敷かれた。鎌倉幕府は、鎌倉と (31) (32) との間に飛脚の制度を設けた。朝廷の動静を監視し、直ちに鎌倉に通告するという必要があったのである。幕府にとって重要なことがあれば早馬が走った。こうした情報伝達の速さは (33) (34) の死去に関わる次のようなエピソードからもうかがい知れる。源頼朝は (33) (34) によって東国での支配権を認められていたものの、征夷大將軍となることは反対されていた。その後、 (33) (34) が死去すると、その知らせは三日後には鎌倉に伝えられたという。頼朝は征夷大將軍にその年のうちに任命された。

室町時代になって、地方産業が栄え、遠隔地取引もさかんになると交通路が発達したが、交通量の増加に目をつけた幕府、寺社、公家などが次々と関所を設けて関銭（通行税）などを徴収した。例えば、先に東大寺再建のために関銭徴収を認められていた (35) (36) の関税徴収簿には、1年間で2千数百艘以上の船の出入りがあったとされている。戦国時代を迎えると、幕府の統制力も弱まり早馬や飛脚はすたれた。

しかし、織田信長や豊臣秀吉は、多くの関所を廃止し、道路を整備するなど、商業の発展を促し、交通・通信をさかんにした。さらに、江戸幕府は、公用書状の通送制度として (37) (38) を設置した。東海道・中山道には宿が設置され、人馬の提供を義務づけられたが、指定された村では、不足しがちな人馬を補うよう (39) (40) が課されたりなどした。

明治政府は、前島密の建議によって郵便制度を導入し、1871年、東京―大坂間で郵便事業を開始した。翌年、駅通制の改革を行い、郵便を全国に展開した。電信は、後に外務卿となり樺太・千島交換条約締結を実現した (41) (42) を中心にその建設が進められ、東京―横浜間に開通することになった。電話については、その必要性が認識されつつも、政府の財政難もあり、その実現は遅れていた。通信省により東京―熱海間に電話線が架設され、公衆市街電話の取扱いが開始されるには、1889年まで待たねばならなかった。

このように個対個のコミュニケーションは様々な制度上の変革や技術革新によって変化してきたが、その一方で、新たな技術によって、多数の人たちに対して伝達を同時に行うコミュニケーションが可能になった。マスコミュニケーションは社会に対してより大きな影響を与えるようになったのである。

江戸時代にも瓦版が多くの人たちによって読まれていたが、明治の半ば、輸送機関の拡大や通信制度の民間への普及、さらには大部数の発行が可能な活版印刷によって多くの新聞が発行された。自由民権運動などに関する政治評論中心の新

聞に対して、(43) (44) は江戸の瓦版の伝統を継いだ大衆紙で、漢字にふりがなをつけるなどの読みやすさもあって全国で人気を得た。また、大正半ばに総合雑誌を創刊した (45) (46) は、『現代日本文学全集』シリーズを1冊1円で売る企画をヒットさせ、昭和初期の円本ブームを牽引した。こうした大量・低価格出版のブームにより、活字文化の大衆化は一層促進されることになる。

そのほか、さらなる技術革新によって可能となったラジオ、映画は大衆文化の広がりをもたらしただけでなく、人々の心にも大きな影響を与えるようになった。ラジオのスポーツ実況放送や1930年頃にトーキーとなった映画は大いに人気を博した。第二次世界大戦後、並木路子が映画『そよかぜ』で歌う『 (47) (48) 』は大ヒットし、ラジオにのって戦後の焼け跡で悲嘆にくれる人々を元気づけ、復興に寄与した。

1953年には、テレビ放送が開始され、それは大衆文化の発展や広告などによる大量消費にも寄与することになる。また、(49) (50) 内閣の下で行われた電電公社の民営化などを契機に通信事業の世界にも大きな変化が生まれ、コミュニケーションのあり方も多様化することになった。

[語群]

- |           |              |           |            |               |
|-----------|--------------|-----------|------------|---------------|
| 01. 青い山脈  | 02. 尼崎関      | 03. 愛発関   | 04. 井上馨    | 05. 岩倉具視      |
| 06. 岩波書店  | 07. 上を向いて歩こう | 08. 駅     | 09. 駅馬     | 10. 大新聞       |
| 11. 大平正芳  | 12. 改造社      | 13. 駕籠役   | 14. 京都守護   | 15. 京都所司代     |
| 16. 京都代官  | 17. 小泉純一郎    | 18. 郷役    | 19. 古事記    | 20. 後白河法皇     |
| 21. 小新聞   | 22. 主婦の友社    | 23. 続日本紀  | 24. 定飛脚    | 25. 白河法皇      |
| 26. 新潮社   | 27. 助郷役      | 28. 崇徳上皇  | 29. 須磨関    | 30. 大日本雄弁会講談社 |
| 31. 大名飛脚  | 32. 高倉上皇     | 33. 竹下登   | 34. 田中角栄   | 35. 朝野新聞      |
| 36. 継飛脚   | 37. 寺島宗則     | 38. 伝馬    | 39. 東京ブギウギ | 40. 中曽根康弘     |
| 41. 日新真事誌 | 42. 日本後紀     | 43. 日本書紀  | 44. 馬借     | 45. 兵庫北関      |
| 46. 副島種臣  | 47. 武家伝奏     | 48. 文藝春秋社 | 49. 宮沢喜一   | 50. 郵便報知新聞    |
| 51. 淀関    | 52. リンゴの唄    |           |            |               |

### 問題Ⅲ

次の本文と本文中の下線部(ア)～(オ)に関する設問を読み、文中の空欄 (51) (52) ～ (73) (74) に入る最も適切な語句を下の語群より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。

幕藩体制は、もとより自給自足をたてまえとする農村を土台として、都市と商業資本の発達を領主の権力下に統制し、武士たちが支配者の地位に立つという構造であった。近世も中期となると、幕藩体制の安定化は商品流通の著しい発展を促し、貨幣経済は都市のみならず農村においても深く浸透することとなる。

東海道川崎宿の本陣の当主であったある農政家は、その体験に基づき著した地方書『 (51) (52) 』の中で、「…古しへより<sup>まぐさ</sup>秣の馬屋ごへにて耕作を済したるが、段々金を出して色々の糞<sup>こや</sup>しを買事世上に専ら多し…」と記した。これは、当時進められていた新田開発により、それまでの秣などによる肥料の自給自足が滞り、やがて金肥へと変遷する様を描き出したものである。とくに綿花栽培の速効性肥料である干鰯の需要が大いに増し、昇亭北寿が『大漁獺正写の図』に描くように、九十九里浜では大規模な (53) (54) 漁法による鰯漁が行われ、干鰯が大量生産された。だが『 (51) (52) 』には、この干鰯がかつては一両で50～60俵購入できたものが、今や7、8俵にもならないことが指摘されており、このような物価の高騰が、農家の経営を苦しいものとしていたことがうかがえる。<sup>(ア)</sup>

都市に集住する武士たちも消費に重きを置く生活を営むようになるが、彼らも低迷する米価に比して上昇を続ける諸物価に困惑し、俸禄米などを担保に借金せざるを得なくなった。さらに大名においてさえも、「大モ小モ、皆首ヲタレテ町人ニ無心ヲイヒ、江戸、京都、大坂、其外処々ノ<sup>たのん</sup>富商ヲ<sup>つづ</sup>憑<sup>ばかり</sup>デ、其続ケ計ニテ世ヲ渡ル」有様であったことを、古学派の儒者 (55) (56) は1729年に著した書の中で報告し、農業衰退・商工業興隆を国家の大害として憂い、重農論・貴穀賤金論を大いに主張する。こうした商人の勢いが増大することについて、 (55) (56) が入門し師事した (57) (58) は、「商人の心、職人・百姓には違い、もと骨折らずして居ながら利をもうくるもの」<sup>(イ)</sup>と認識した。そして、困窮する武士との関係も「商人主となりて、武家は客なり」と評した。

このような貨幣経済とそれを基盤とする商業資本の急激な発展は、 (57) (58) によって、封建体制の根幹に関わる大問題として憂慮された。彼はさまざまな物品の値段を武士の思うままに統制し「武家主となりて、商人は客」とするために、「武家みな (59) (60) 所に住する」べきであると自著で説く。武士が自らの (59) (60) 地を離れ城下に集住し、「衣食住初め箸一本も買い調えねばならぬ」その姿は、「旅宿の境界」に入ることと譬えられた。こうした (57) (58) の論じる武士のあり方には、兵農分離以前の古の武士のイメージがあったといわれる。

#### 設問

(ア) 『 (51) (52) 』は時の江戸町奉行を通じ將軍 (61) (62) に献上され、当時の農村の実情や幕吏の不正、さらに地方役人の民政のあり方などへの批判が為政者の知るところとなった。この意見書に見られる提案の一部は、実際の幕政改革にも採用されたとみられている。

(イ) 本百姓体制を護る目的から幕府が1722年に発令した (63) (64) は、事実上の土地売買を抑えることをねらいとしていたが、各地で騒動が生じ翌年廃止された。

(ウ) 元禄期ごろになると、商業・金融業の発達にともなって多くの新興商人たちが現れてくる。江戸時代初期に伊勢松坂で酒造・質屋・高利貸しを営んでいた (65) (66) は、その後、三都で豪商として活躍する一方、幕府の金銀為替御用達を務めた。

- (エ) (55) (56) は、後年著した『(67) (68)』において、商業藩営の利点に着眼した意見も述べている。これは後に財政の再建を目指す諸藩によって、積極的に商業利潤を追求するために採用される殖産専売制につながる内容であり、各地に(69) (70) が設置され特産品を保護管理することが努められた。
- (オ) こうした豪商の営みには、(71) (72) と呼称されるものもあり、巨利を得るものではあったが、時として巨額な債権の回収ができない場合もあったため、大きな危険が伴った。(65) (66) を継いだ三代目当主は、1728年に成った自著『(73) (74)』の中で「(71) (72) の商売は博奕のごとく」と述べて、豪商の倒産事例に依りながら(71) (72) や奢侈などを戒めた。

[語群]

- |              |             |            |               |           |
|--------------|-------------|------------|---------------|-----------|
| 01. 相对済し令    | 02. 会津農書    | 03. 上げ米令   | 04. 安藤昌益      | 05. 家継    |
| 06. 家斉       | 07. 家宣      | 08. 家治     | 09. 石田梅岩      | 10. 伊藤仁斎  |
| 11. 伊藤東涯     | 12. 請け返し    | 13. 運上所    | 14. 大蔵永常      | 15. 大敷網   |
| 16. 大原幽学     | 17. 荻生徂徠    | 18. 御救小屋   | 19. 勘定所御用達    | 20. 棄捐令   |
| 21. 紀伊国屋文左衛門 | 22. 蔵米取     | 23. 経済要録   | 24. 経済録拾遺     | 25. 経世秘策  |
| 26. 儉約令      | 27. 広益国産考   | 28. 公領     | 29. 国産会所      | 30. 越荷方   |
| 31. 御料       | 32. 在家      | 33. 佐藤信淵   | 34. 質流れ地禁令    | 35. 地曳網   |
| 36. 借知       | 37. 定免法     | 38. 政談     | 39. 制度通       | 40. 世事見聞録 |
| 41. 大名貸      | 42. 太宰春台    | 43. 田中丘隅   | 44. 知行        | 45. 町人考見録 |
| 46. 町人囊      | 47. 綱吉      | 48. 定置網    | 49. 田畑永代売買の禁令 | 50. 天領    |
| 51. 土倉       | 52. 奈良屋茂左衛門 | 53. 農業全書   | 54. 農具便利論     | 55. 延売貸   |
| 56. 服部南郭     | 57. 藩翰譜     | 58. 半知     | 59. 船曳網       | 60. 分地制限令 |
| 61. 弁道       | 62. 本多利明    | 63. 本朝通鑑   | 64. 三井高利      | 65. 宮崎安貞  |
| 66. 民間省要     | 67. 本居宣長    | 68. 八手網    | 69. 柳沢吉保      | 70. 吉宗    |
| 71. 寄場組合     | 72. 淀屋辰五郎   | 73. 六諭衍義大意 | 74. 老農夜話      |           |

#### 問題 IV

次の〔1〕～〔4〕までの文章は、いずれも、ある一人の政治家の回想録から抜粋したものであり（問題作成のため、原文は大幅に改めてある）、本文中に出てくる「私」はすべて、この回想録の著者を意味する。下線部（ア）～（エ）に関する設問も読み、文中の空欄（75）（76）～（99）（100）に入る最も適切な語句を下の語群より選び、その番号を解答用紙の所定の欄にマークしなさい。なお、○と×は、問題作成上、あえて伏せ字にしたものであり、各々同じ言葉が入る。また○と×の各々の数は、必ずしも字数を示しているわけではない。

〔1〕 私は、（75）（76）内閣の時に、大蔵大臣として入閣した。大蔵次官には、専売局長の（77）（78）をもってきたと思っていた。ところが（75）（76）の秘書官が、次官には勝田主計をしてくれと伝えてきた。そこで、総理大臣がそういわれるなら、その通り決めますと、勝田を大蔵次官にした。するとこんどは、通信大臣の（79）（80）が、（77）（78）に通信次官になってくれとやってきた。いったい（77）（78）は評判のいい男で、（79）（80）が満鉄の総裁になった時も、（77）（78）に満鉄の理事としてきてくれといたそうだ。

（75）（76）のヨーロッパ行きの目的の一つは、外国の政党事情をよく調べて自分の政党の参考にしようというのであった。ところが急転直下、再び政界に乗り出すことになったので、かねての念願たる新政党の樹立に着手することになる。

他方、年末に招集された議会は年明けまで休会となったが、（75）（76）内閣を取り巻く形勢は日に日に悪くなっていった。宮中から出て大命を受けたのは非立憲である、と批判されたのである。政友会と犬養毅一派が中心となり運動を起こし、議会の内外に盛んな氣勢が挙がり、（75）（76）は辞職に追い込まれることになる。その後、（75）（76）は逝去することになるが、彼の企図した新政党は、（81）（82）の成立となって実現する。発足当初の（81）（82）は、総務の合議制で党運営をしたが、事務の運用も<sup>はかど</sup>捗らないので（83）（84）を総裁に選んだ。

〔2〕 ヨーロッパ戦争時に開かれた閣議で、（83）（84）外務大臣は、○からわが国に、膠洲湾にいる（85）（86）の軍艦があばれて、○の商船などがやられて困るが、日本海軍で、（85）（86）の軍艦を追っ払ってくれんかといって、申し込んできたということを報告した。同盟の情誼からいって、一方が苦しんでいる際に、これを助けるのが正常だと思うが、閣僚諸君のお考えを伺いたいというのであった。そしてつけ加えて、我が国は（87）（88）でひどい目にあったが、膠洲湾に手をつけるのは、それに報いるいい機会だと思うといった。それに対して、みな賛成の様子であった。だが私だけは、おいそれと返事ができなかった。大蔵大臣であった私が、これに賛成すれば、財源を作って戦費を調達しなければならんからである。閣議は深夜にまで及んだが、戦局が拡大するにしても、（85）（86）の海軍が日本を攻めて来ることも、日本がそれに屈服するなどということも有り得ない。そう莫大な軍費を要することはないと結論づけて、私は最後にこれに同意した。

〔3〕 政友会を与党とする内閣が出来て、憲政会はまだ在野党になった。私は金のできない総裁である。金のできない総裁は困るという空気は、そうだれも私にいわぬが、感ぜられてきた。私は、機会を見て、総裁をやめようと思った。ちょうど憲政会と政友本党が合併をして、新党を創立することになったので、私は、新党の総裁に（77）（78）を推し、彼を勧説しこれを実現させた。

[4] 日米交渉は暗礁に乗り上げたまま、(89) (90) 内閣は総辞職をした。(89) (90) は、<sup>(ツ)</sup>五摂家に生まれ、学校を出るまで温室の中で育った。頭脳は良いのだが、苦勞が足りんから、ほかから持ち上げられ、誤られ、利用されるのである。(89) (90) が軍人に受けるのは、それは利用されるからである。(89) (90) のごときその高い家柄とか、その世間受けの人気とか、いろいろの点が、少なからず軍人に利用されたことは、見逃すことができない。

(89) (90) の後任総理大臣ご下問のため、いわゆる (91) (92) が召し出された。そもそも帝人事件で辞職した内閣の後継首班を指名するため、西園寺公およびいわゆる (91) (92) なるものがお召しを被り、ご下問に奉答することになった。これがいわゆる (91) (92) 会議のはじまりである。「いわゆる」というのは世間でそういうだけで、表向きには (91) (92) という言葉は使われないからである。

(89) (90) の後継首班を選出する (91) (92) 会議では、陸軍に最も人望のあるのは、××なので、彼を推すのがよろしいといった人もあった。私はこれに対して、日本が××を総理大臣に推すということは、米国をして、日本はいよいよ戦争を決意したと誤解せしめるおそれがある。これは目下最も注意しなければならんことである、といって反対したのだが、その時<sup>(エ)</sup>内大臣は、××に大命が降っても、大命降下の際、特に米国と平和を維持するような政策をおこなうようにせよ、とのお言葉があるかもしれんから、××は戦争を起こすようなことはしないであろう、という意味のことを漏らされたので、一同はいささか意を安んじた模様であった。いわゆる (91) (92) 会議は決を採るものではないので、会議はその程度で散会したが、事実は××が大命を拝した。

#### 設問

(ア) (79) (80) は、満鉄の初代総裁、内相、東京市長を歴任し、関東大震災後には、帝都復興院総裁として東京市復興計画を立案したことでも知られている。因みに、この回想録の著者が首班を担った政権は、関東大震災の打撃で決済不能になった手形処理関連の問題でつまずき、その対策のために企図した勅令案が (93) (94) で否決され総辞職に追い込まれることになった。

(イ) (81) (82) の後身と位置づけられる憲政会の総裁は (83) (84) が引き続き務める。その後、(83) (84) の死去に伴い、この回想録の著者が総裁の座に就くが、政友本党との合併による新政党結成を契機に (77) (78) に党首の座を譲ることになった。この新政党は、(95) (96) 結成まで議会の有力政党として存続する。

(ウ) 青年時代の (89) (90) は、河上肇を慕い、東京帝大から京都帝大に転じた。(89) (90) が、後にマルクス主義経済学に傾倒することになる河上肇を慕い転学したことは、彼の経歴の中でも注目される事実である。また、政治家としての (89) (90) に期待を寄せる人々により結成された昭和研究会は、彼のブレーン集団としての機能も果たすことになるが、そこには、諜報活動が摘発された (97) (98) 事件に際し、検挙されることになる尾崎秀実も参加していた。

(エ) この時に内大臣を務めていたのは (99) (100) である。内大臣は、天皇を補佐する宮内官であるが、当時は (91) (92) 会議の幹事役を務めていた。したがって、(99) (100) の日記は、同時代の政界中枢の動きを記したものとして、さらには東京裁判に証拠資料として提出されたことでも有名である。



[語群]

- |           |               |                |           |           |
|-----------|---------------|----------------|-----------|-----------|
| 01. アメリカ  | 02. イギリス      | 03. 伊東巳代治      | 04. 内田康哉  | 05. 大隈重信  |
| 06. 大津事件  | 07. 岡田啓介      | 08. 華族         | 09. 桂太郎   | 10. 加藤高明  |
| 11. 企画院   | 12. 貴族院       | 13. 木戸幸一       | 14. 清浦奎吾  | 15. 義和団事件 |
| 16. 元勳    | 17. 憲政党       | 18. 憲政本党       | 19. 元老    | 20. 元老院   |
| 21. 小磯国昭  | 22. 国民同盟      | 23. 後藤新平       | 24. 近衛文麿  | 25. 斎藤実   |
| 26. 三・一五  | 27. 三国干涉      | 28. 四国艦隊下関砲撃事件 | 29. 幣原喜重郎 | 30. 衆議院   |
| 31. 重臣    | 32. 進歩党       | 33. 人民戦線       | 34. 枢密院   | 35. 鈴木貫太郎 |
| 36. ゾルゲ   | 37. 大政翼賛会     | 38. 大日本政治会     | 39. 高橋是清  | 40. 田中義一  |
| 41. 中国    | 42. 寺内正毅      | 43. ドイツ        | 44. 東条英機  | 45. 東方会   |
| 46. 床次竹二郎 | 47. ノルマントン号事件 | 48. 浜口雄幸       | 49. 原敬    | 50. 広田弘毅  |
| 51. フランス  | 52. 牧野伸顕      | 53. 町田忠治       | 54. 松岡洋右  | 55. 山本五十六 |
| 56. 山本権兵衛 | 57. 翼賛政治会     | 58. 横浜         | 59. 米内光政  | 60. 四・一六  |
| 61. 立憲国民党 | 62. 立憲同志会     | 63. 立憲民政党      | 64. ロシア   | 65. 若槻礼次郎 |